

(論文)

ドイツにおける子どもの貧困（1）

田畑 洋一

ドイツにおける子どもの貧困(1)

田 畑 洋 一

和文抄録：貧しさの中で育つ—とりわけ社会的、文化的、教育的に刷り込まれた貧しさの中で—ということは、発達リスクを被る可能性を意味する。このリスクは、社会から代償として要求される発達課題を克服する過程で、子どもたちに悪影響を与える。全体として、経済的欠乏状態が文化的・社会的資本の獲得に及ぼす影響により、貧困の固定化が促される。同時に家庭内の社会的・文化的資源が、現在の貧困を克服するためにも、将来の生活における参加機会を分配するためにも、決定的に重要になってくる。本稿は、そうした観点から豊かな国ドイツにおける子どもの貧困について、その長期にわたる影響メカニズムを考察した。

Key Words: 子どもの貧困、社会階層の再生産、ハビトゥス、参加機会

はじめに

はじめに

- I 研究の背景と目的
- II 先行研究
- III 子どもの貧困および貧困度測定
- IV 社会階層の再生産
- V ドイツ国内のこどもの貧困
- VI ドイツ国内の貧困状況再生産について (以下、次号)
- VII 考察—子どもの貧困と生活における機会均等
おわりに

子どもの貧困は、子の将来に大きく影響するだけに深刻な問題であり、経済大国といわれている国々においても存在する。2012年5月のユニセフの研究所の発表によれば、世界第3位の経済大国でありながら、わが国の子どもの貧困率は14.9%で、

OECD35か国中、9番目に高い国となっている。同じ経済大国のドイツは8.5%と低いのが、両国においては近年、長い間放置されていた子どもの貧困の問題が注目され、子どもの貧困現象を分析した多くの一連の研究が発表されている。これらの言説を一過性のものにとどめないため、本稿では豊かな国ドイツにおける子どもの貧困について、先行研究に依拠しつつ、とくに長期にわたる影響メカニズムと社会的排除の克服戦略に関して、二稿に分けて述べることにする¹。

I 研究の背景と目的

ドイツ国内において子どもの貧困は、長い間、さほど重要でない付随現象だと考えられてきた。しかし、連邦政府の「第一次貧困・富裕レポート」(2001)によって、豊かな国ドイツにおいても貧困の存在が公的に認められ、それ以降、貧困と格差が社会問題の焦点となり、とくに子どもの貧困が注目されるようになった(田畑,2012:50)。そのため、ここ数年の間に教育の機会均等をめ

ぐる論議に再び火がつき、子どもの貧困現象を明確に分析した一連の研究が発表された²。これらの研究は、貧困状況が児童の現在の生活条件や自己実現の参加機会に及ぼす影響について、詳しく描き出している。それでもなお、貧困構造が世代を超えて固定されるのかどうかは、はっきりしていない(Röleke,2009:3)。したがって、本稿においては、ドイツにおける子どもの貧困を、どの程度まで社会構造特有な再生産形式として解釈できるか、という問題を扱う。その目的は、個人的および制度的メカニズムが、生活における参加機会のいわゆる継承を助長するのか、明らかにすることである。

ドイツの貧困児童の状況については、所得状況を観察しただけでは不十分である。貧困は多次元の現象であり、生活の様々な領域に影響を及ぼすからである。したがって、中心的次元、すなわち、物質的供給、教育、住居、健康、余暇、社会適合において供給不足のもたらす影響と結果についても概略することとする。

子どもの貧困は、子ども自身に責任がないにもかかわらず、貧困の連鎖を生むため、子どもの貧困に対処することが社会全体の便益につながる。子どもの貧困の連鎖を断ち切ることで、大人の貧困ものちのち緩和できる」(阿部2009:247)のである。そうした観点から、以下、貧困状況のスナップショットに続き、長期にわたる影響メカニズムを論理的順序に従って考察する。

II 先行研究

1) 貧困の概念

貧困という概念については、意見が激しく対立しており、包括的、共通的に認識された定義は今までのところ存在しない(Hock,2000:19)。貧困とは概して不足状況をさす、という以外にコンセンサスは得られていない。貧困は絶対的貧困と相対的貧困に区別することができるが、前者は生存に重要な物、たとえば、食料、衣服、住居や、医療看護において、肉体の存在を脅かすような不足を言う。一方、対象者がその社会の生活基準を指針とする社会文化的生活最低ラインを下回る場合は、相対的貧困に当てはまる(Axhausen,2002:36)。西洋工業国において、絶対的貧困は個々の特殊なケース以外には生じないので、相対的貧困に焦点が当てられることになる。このことは、たとえば、1984年12月19日付の貧困概念に対する欧州共同体評議会決議にも反映されている。

「個人や家族、グループが(物質的および文化的、社会的に)わずかな手段しか持たないために、彼らが生活している加盟国において、最低限享受できる生活様式から締め出されている場合に、それらの個人や家族、グループは貧しいと見なされる。」(欧州連合理事会、1984:25)。

貧困とは「環境に左右され常に解釈の必要な生活世界的現象」(Beisenherz,2002:294)であり、その環境においてでなければ評価できない。その際に物的側面、たとえば、生活費や福祉国家給付の可能性、生活世界的環境ばかりでなく、時代的な発展も重要である。貧困状況の主観的評価

にも、同じことが言える。貧困について、どれだけ強く意識しているか、不当だと感じているかは、当事者の個人的状況ばかりでなく、社会全体の状態によっても左右される³。貧困の各定義もまた、その提唱者の重点および目的と分かち難く結びついている。貧困境界線の設定において、その傾向は著しい。なぜなら、絶対的形式においても相対的形式においても、基準を設定せずに貧困境界線を設定することは不可能だからである(Hock,2000:20)。その結果、たとえば、学者が貧困状況をきわめて正確に記述しようと努める一方で、政治家たちはむしろ現場を容認しそれを前面に押し出す⁴。その結果、特定の目的や特定の環境に基づいて、多数の様々な貧困定義が生じる。貧困に対して世界共通の定義を下すなど、現在もなお程遠く思われるのは、貧困概念のこのような複雑さとその基準の性格にも一因がある。ここでは一般的な貧困の概念について説明する必要がある。そうすれば、児童の貧困の定義と測定の特異性を掘り下げることができるはずである。

2) 資源アプローチ

資源アプローチは、貧困を決定する根本的基準のベースに所得状況を捉える。一定の所得下限を下回った場合、所得において貧困であるとする。この際、単純で比較しやすいデータを集めるために、貧困概念は意識的に次元に限定され、そのため、政治でも学界でも用いられることが多い。所得下限は様々な方法で設定されうる。学者はしばしば、社会特有のマーケットバスケットを持ち出す。マーケットバスケットには、人間にふさわしい生活を保障するのに必要な最低需要が含まれており、それぞれの社会の平均所得に基づき判断する方法もよく知られている。この方法によれば、ドイツでは平均手取り等価所得の50%未満の所得しかない人は、貧しいと見なされる。政策上の貧困境界線は社会扶助、すなわち、マーケットバスケットを土台に定められ、年金額と連動する国内最低生活費がベースになっている(Hock,2000:22)。ここで批判的なコメントを付け加えると、どちらの手順も社会の福祉発達段階に密接に結びついており、特定グループの特異的な必要性は十分に考慮できていない⁵。貧困概念を物質的供給に限定するために、貧困状況の環境も無視される。

3) 生活状況アプローチ

生活状況概念は、資源アプローチの弱点を補うために、自由になる所得を幅広い生活領域と関連付けている。このアプローチは、オットー・ノイラートにより20世紀初頭に土台が開発され、後にゲルハルト・ヴァイサーらにより具体化されたものである。ここでは労働、教育、住居、健康、社会参加、そして主観的心地よさが中心次元と考えられる(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:128)。各次元の供給状態、ならびにその相乗作用が個人特有の生活状況を決定する。この点についてヴァイサーは、次のように述べている。

「人が妨げられずに徹底的に内省する時、自分の生きる意義にとって決定的だと見なす願望、

その土台となる願望を叶えるために外部状況が人に与える余地。」(Leßmann,2006:33)。

したがって、貧困とは複数の中心次元において供給が不足しているために、その余地がもはや与えられなくなった場合である⁶。この見方によれば、貧困は一見、多次元にわたる現象であるように思われる。このアプローチの大きな欠点は、まさにそこにある。なぜなら、行動の余地は、生活領域の多様性を観察しただけでははっきりと認識できないし、また、貧困境界線を明確に定めるのが難しくなるからである(Leßmann,2006:39)。

4) 潜在能力アプローチ

アマルティア・センは潜在能力アプローチにより、生活状況概念を資源の個人的実用化という要素にまで拡大している。センは、基本的な実現参加機会の不足、すなわち「根拠があって彼が心から望んでいる生活、そのような生活を送るのを可能にする、実質的な自由」(Sen,2000:110)の不足を貧困と見なしている。実現可能な生活設計(潜在能力セット)における個人的潜在能力の基本的設定量として、センは一方では財政資源(所得と資産)および非財政資源(たとえば、教育や健康)による蓄えを特定する。しかし、他方では、社会により条件が定まる道具の自由も、決定的な影響を持つ。この自由は政治的・社会的機会ばかりでなく、国の保障する環境保護および社会的保護によっても度合いを測ることができる(Arndt/Volkert,2006:11)。そのため、所得は確かに個人生活における参加機会の基本資源を形成するが、この基本資源は、具体的な活動や能力(生活機能)に換えて初めて現実化される。この変換過程は、各種の社会要因および個人的要因により影響される⁷。実際に手の届く生活状況の数が増し、主観的質が高まると共に、個人の安寧も増大する(Sen,2000:162-163)。この事から結論として、実践に当たっては、物質の供給ばかりでなく、資源の実用化も保障されて初めて貧困の撲滅も成功するといえよう。

III 子どもの貧困および貧困度測定

貧困研究における子どもの貧困は、長い間まったく顧慮されることがなかった。90年代に児童の権利と福祉に関する公の議論が広がるにつれ、政治のパラダイムシフトが起こった結果、初めて児童に独立した法的主体の地位が認められ、学界においてもようやく独自の問題分野として認められるようになった(Hock,2000:19)。しかし、今日に至るまで、貧困状況の主体として、児童に焦点を当てて考察した調査は非常に少ない。今でも子どもの貧困率を算出するのに、家族の所得や社会扶助受給額を基準にする。しかし、これでは、実際の資金分配状況と、そこから生じる児童の供給状況は、顧慮されないままである(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:127-128)。また、児童の具体的な生活状況には、物質の供給以外にも多数の要因が影響を及ぼしているという事実が、貧困概念の制限によって隠されてしまう。そのような要因には、社会的・政策的枠組みとなる条件、家族の生活状況、個人的環境、ならびに専門家による支援提供などがある(Hock,2000:30)。

子どもの貧困を規定する最初の独立したアプローチを行ったのは、ベアーテ・ホックおよびゲ

ルダ・ホルツにより実施された、ドイツ国内の子どもの貧困と将来の参加機会に関する社会労働教育研究所・労働福祉連盟調査などである。この調査では生活状況アプローチを基に、供給不足の可能性のある5つの異なる領域を区分しており、家族の物質的状況を基本次元とする。その他に基本となる物質資源、文化資源、社会資源に対する子どものアクセス状況、ならびに児童の身体的・精神的安寧が考察されている。各次元における生活状況は最後に生活状況類型システムとしてまとめられ、安寧、一つの次元における供給不足(ハンディキャップ)、そして複数次元における供給不足(複合剥奪)に区別される。しかし、最低一つの生活次元における供給不足に加えて、家族の所得貧困が確認されなければ、子どもの貧困としては扱われない(Holz,2008:484-485)。この概念では、確かに貧困現象の多次元性は顧慮されているものの、存在する資源を児童がどの程度使用できるのかについて、まだ顧慮されていない。

したがって、子どもの貧困は、センの潜在能力アプローチに基づき、実現可能な参加機会の欠乏であると定義すべきであり、物質資源や文化資源、社会資源における供給不足ばかりでなく、それらの資源を児童が実用化する可能性が欠けても、子どもの貧困は引き起こされる場合がある(Röleke,2009:9)。

IV 社会階層の再生産

たとえば、フランスの社会学者であるピエール・ブルデューの社会不公平論は、あらゆる社会において社会階層は世代を越えて再生産される、というテーゼを代表している(Röleke,2009:10)。その原因は、人によって異なる資源の蓄えと、階級特有のハビトゥスであり、この二つは、生活における参加機会の実現と個人の出身社会とを関連付けている。したがって、資本、ハビトゥス、社会空間、ならびにこれらが社会階層の再生産に与える影響について述べてみよう。

1) 資本

ブルデューは、個人の社会的地位は主にその個人が自由に扱える各種資源に起因すると考える。そして経済資本、文化資本、社会資本を区別する。経済資本は、金銭価値のある個人資産により測定されるのに対し、文化資本には社会が受け継いだあらゆる文化財や資源が含まれる。文化資本は、客体化された形(たとえば、本、芸術作品、工芸品)で現れることも、内包されて、自主的に習得した知識や技能、能力として現れることもある(Bourdieu,2005:55-59)。文化資本の決定的な内面化過程は、家族内の第一次社会化中に起こり、その結果、教育資本は、常に出身社会に応じて獲得される(Bourdieu,1987:180)。とくに習得メカニズム自体の学習は、文化財産への門戸を開くために決定的な意義を持つ(Bourdieu,2005:58)。内包された文化資本は、第三者には評価されにくいので、教育称号を制度化すれば比較できるようになるだろう。社会資本をブルデューは、一人の人の交際ネットワークおよび出身社会から生じるあらゆる機会である、とする(Bourdieu,2005:61-64)。社会では個々の資本種類の分配と価値測定をめぐる、常に争っている。これら資本の種類は、根本的に互いに変換することができるが、正確な変換比率はその環境に左

右される。参加者全員の最終目的は、自分の資源を象徴的資本、すなわち、名声に変えて社会的地位を長期にわたって確保することである(Bourdieu,2005:209-210)。

2) ハビトゥス

ブルデューによれば、個人の社会層はその人が自由に使える資産にだけ反映されるのではなく、その人自身にも反映されている。外部の生活条件は社会化が進むにつれ、内面の構成システム、すなわち、内包された一種の社会構造が変化する(Bourdieu,1987b:101-102)。この、ラテン語の状態・慣習という意味のハビトゥス(Habitus)は、一方では階級特有の知覚パターン、評価パターン、思考パターンから成り、それらを使って環境を分類するのであるが、他方では具体的な行動型のセットとなる(Bourdieu,1987:280)。こうしてハビトゥスは、社会において可能なことと論理的なことの枠をはめ、その枠内で個人は自由に動ける(Bourdieu,1987b:103-104)。パーソナリティは、階級特有なハビトゥスのセットを形成する。セットは個人的経験やそれまでの人生の軌道により、それぞれに特色を持つ(Bourdieu,1987b:113)。社会的相互作用の及ぶ領域において、ハビトゥスは、社会における自己位置誘導感覚(実践感覚)として作用し、この感覚のおかげで行為者は、どのようなふるまいが自分の社会的ポジションにふさわしいのか、本能的に認識する(Bourdieu,1987b:108)。外部に向けてハビトゥスは個人のヘクシス、すなわち、話しぶりや姿勢、動きに現れ、その結果、逆に第三者が分類する基準となる(Bourdieu,1987b:135-136)。このようにハビトゥスは、社会階級の産物=作り出された作品(*opus operatum*)であるばかりでなく、人為的行為の構成=作り出す方法(*modus operandi*)により、階層の再生産にも一役買っている(Bourdieu,1987:281)。

3) 社会空間におけるハビトゥスと資本

誰でも個人は客観的生活条件およびハビトゥスに従って、特定の社会的ポジションを占める。ブルデューは、このことを明らかにするために、各行為者の資本の量と種類、ならびに社会における経歴をもとに、各行為者を架空の社会空間内に位置づけた(Bourdieu,1987:195-197、206)。ここでの社会的経歴は、人生における個人資産量の変化を考慮する、ダイナミックな要素である。個人の地位は、他の社会構成員と関連して初めて決まる。こうして個人特有の職業と生活様式は、それぞれに様々なポジションに位置づけられる(Bourdieu,1987:214)。

社会空間における地位、および地位と結びついたハビトゥスに基づき、ブルデューは3つの異なる階級を設けている(Bourdieu,1987:175)。社会階層の一番上は、エリート市民およびエリート実業家から成る支配階級が占め、この階級が大量の資本と高い社会的地位を手に入れている。この階層のハビトゥスと生活様式は、その下に位置する小市民とは一線を画している。2番目の小市民階級は、とりわけ不均質性と内面的柔軟性の高さに特色がある。小市民のうち階層的に上の方の人々は、並々ならぬ向上意欲があり、支配階級の生活様式を真似しようとするが、それ以外の小市民階級は、現状を維持しようとするに過ぎない。社会階層の一番下には、農民と単純労働

者からなる人民階級が存在する。この階層には資本がまったくなく、したがって、地位を向上させる機会もごくわずかである(Münch,2004:423-424)。

こうして社会全体としては、比較的安定した社会階層再生産システムであるように見える。同じ社会的地位にある人々は、似たような職業や生活様式によってお互いに常に接触を持ち続け、その結果、部外者の入る余地のない閉じた生活サークルを形成している。資本とハビトゥスに関わる階級特有の生活条件は、このようにして世代から世代へと伝えられる。その一方で、ブルデューはダイナミックな社会空間モデルを用い、一人の人の生きる道は、確かにハビトゥスと資本という基本的な備えを刷り込まれてはいるが、だからと言って、完全に決められたわけではない、ということを示している。すなわち、社会再生産の循環は、社会空間内の権力関係や資本関係の変化によって、あるいは個人の促進によって、断ち切ることができる(Bourdieu,1987:188-191)。しかし、ブルデューは、前記の変化も促進も例外であり、ハビトゥスはなかなか変わらない(ヒステリシス効果)ので、新しい資本状態に合わせるのも、資本を実用化するのも徐々にしかできず、その結果、社会的に下層から上に這い上がる参加機会は少ないと見ている(Bourdieu,1987:238)。

V ドイツ国内のこどもの貧困

増加する子どもの貧困の問題は、とくに2008年5月の連邦政府による貧困・富裕レポート第3版の公表と共に広く知られることになった。一般的な認識に反して、このレポートで扱われているのは新しい現象ではなく、長期にわたる変化であり、ハウザーはすでに1997年、この変化を「貧困の若年化」(Hauser,1997:76)と名づけている。貧困該当者としての児童に対する関心が高まったにもかかわらず、視点は今まで、まだ本当には転換していない。したがって、公表された貧困者数はいまだに両親の所得状況に基づいている。その結果、2007年3月現在、社会法典第2編という要扶助世帯に暮らす15歳未満の児童は、190万人である⁸。これに社会扶助受給者、亡命者、さらに記録されていない、つまり隠れた貧困状況で生活する児童を合算すると、ドイツ国内のこの時点で、およそ280万人の児童が社会文化的最低生活費ぎりぎりラインにいる(Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:120)。ここで何よりも目立つのが、該当者の年齢別構成である。2008年10月では、ハルツIV法による受給者世帯にいる児童220万人のうち、3歳未満の児童は100万人である(連邦雇用エージェンシー、2008:21)。時系列で見ると、7歳未満の児童における社会扶助率は、1984年から2004年の間になんと5倍に増えている(Becker/Hauser,2008:1)。全体的に見ると、今日では社会法典第2編による受給者全体の3分の1を児童が占めており、したがって、就業可能な成人と比較して、約2倍の確率で貧困に該当する(連邦雇用エージェンシー、2008:21)。貧困の中で育つリスクは、移住に関連する児童ではドイツ児童と比べ、さらに2倍に増える(BMAS,2008:141)。これらの数値を前に、次のような疑問が浮かんでくる。私たちの現代社会において、児童が貧困状況に陥るケースが頻繁になってきているのはなぜか、そして、この現象は貧困児童の実現可能な社会参加に対して、どのような影響を及ぼしているのか。

1) 子どもの貧困の原因

ドイツ国内で増加しつつある子どもの貧困の原因は、第一に家庭の経済的・社会的状況の変化に求められる。グローバル化に基づく近代化プロセスにより、貧困が社会文化から解放され、平行して新たな社会リスクが生じた。「貧困は一時的な生活状況、そして潜在的リスクとして中間層に到達し、もはや従来の周辺層に限定されなくなっている。」(Buhr,1998:73)。

とくに明らかになってきているのは、いわゆる「リスク社会⁹⁾」の労働市場における新たな挑戦である。自動化とサービス社会へと変化が進むにつれて、生産分野の雇用機会が減り、構造的失業を引き起こしている。市場自体も失業を食い止めることができないために、失業が固定化する恐れがある。児童はほとんど例外なく就業者のいる環境で育つため、このような変化の影響を大きく受けている。この点について、連邦政府による貧困・富裕レポート第3版は、児童の生活環境に対する継続的な所得の重要性を指摘する。児童の貧困リスクは、失業者の場合48%であるが、両親の就業により4～8%に減少する(BMAS,2008:94)。

失業は従来の貧困リスクに含まれる。しかし、ドイツでは、働いているのに貧困であるケースが増えている。通常の雇用関係、すなわち「無期限で、社会法ならびに労働法および団体協約上保護されたフルタイムの雇用」(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:67)が何年もの間、社会市場経済を形成してきたが、経済自由化の波に乗って、融通の利く雇用形態、たとえば期限付きの派遣労働、ミニ・アルバイトやメディ・アルバイトなどに替わった。このような変化につれて、短期間に低賃金層が大幅に増え、今日ではすでに被雇用者全体の3分の1を占めている。貧困問題に関して政府自体も、この変化を批判的に考察している。「フルタイム就業でさえ賃金の低い分野が増えるにつれ、就業者でも貧困リスクが高まっている。」(BMAS,2008:第7章) とくに一つの所得源で複数の人を養わなくてはならないところ、つまり家庭において、収入の少ないフルタイムの仕事は生存を脅かしている。2007年1月には、社会法典第2編による受給者で子どものいるカップルのうち、59%が就業している上乗せ受給者であった¹⁰⁾(BMAS,2008:95)。

労働市場改革の影響は、家族構成の深刻な変化によりいっそう強まっている。新しい同居スタイルに合わせた社会の変換が進む中で、男性を扶養者とする夫婦という従来のシステムは、押しやられてしまった¹¹⁾。現代の親・子世帯、たとえば、パッチワークファミリーや単親家族は、労働市場でも家族政策でも、その需要に合わせた整備ができていない(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:69-71)。この状況はとりわけ、増加中の独りで子育てしている母親にとって不利である。女性はあまりにしばしば低賃金層で就業している¹²⁾ばかりでなく、ドイツ連邦平均に比べて失業リスクが4倍もある。この理由として、柔軟性のある就業モデルの不足と、いまだに夫婦を中心としたドイツ家族政策¹³⁾が挙げられる(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:75)。このような政策は社会的経済基盤に関する対策、たとえば、児童の全日保育提供拡充などよりも、財政的家族負担調整を優先させるので、パートナーのいない家族と職業との調和を妨げている¹⁴⁾。したがって、ドイツは独りで子育てする者の子どもがさらされている貧困リスクが、経済協力開発機構加盟国

中、最も高い国の一つであっても、なんら不思議ではない(Beisenherz,2002:60)。

2) 貧困と生活における参加機会

貧困状況は、幼児時代の早いうちから児童の社会参加や発達の機会を左右する。2000年の社会労働教育研究所の調査によれば、調査した貧しい6歳児のうち、40%が根本的供給を十分に受けていなかった。担当者の報告によると、子どもたちはお腹をすかせて福祉施設に来ることが多いという。そのような子どもは、明らかに体のケアが行き届いておらず、団体活動費を工面することもできなかった。したがって、このような子どもたちは、早くから疎外感を味わう経験をしており、同年代の子どもたちに比べて、認識ばかりでなく社会的にも発達が遅かった¹⁵。貧困が続く場合、これらのマイナス点をも固定化する。

しかし、根本的供給(質の良し悪しは問わない)が保障されていても、貧しい子どもたちは経済的・社会的可能性の壁に日々ぶち当たる。このことは、とりわけ余暇分野において、はっきりする。ドイツ児童の73%はクラブや音楽教室、その他のグループで、定期的に活動しているが、最下層¹⁶の児童でこのような活動に参加できるのは、47%に過ぎない(BMAS,2008:132)。旅行や動物園へ出かけるのも、この子たちの生活ではめったにない経験に入る(Beisenherz,2002:77)。家族の住環境も、子どもが社会に参加するのを妨げる要因になる場合が多い。ドイツの貧困化は、しばしば比較的物価の安い居住地域への引越しを意味する。そのような地域は、たいていの場合、社会問題的となっている。すなわち、「住民の生活条件、とりわけ児童や青年の成長機会を、マイナスに決定する要因が山積みになっている居住地域」(Dangschat,1998:124)である。このようにして、子どもたちは出来上がった社会ネットワークから引き裂かれ、社会的に孤立した新しい環境に移転させられる。新しい環境には社会的接触はなく、貧困や暴力、参加機会のなさという現実生活の他は、何も残されていない(BMAS,2008:100)。

とくに明白なのが、教育分野に及ぼす貧困の影響である。児童が文化的・社会的資本を習得し、人生を克服する能力を獲得できるようにするのが、学校の本来の役割である(Zander,2008:143)。貧困児童は前提条件が悪いために、このような恩恵にまったくあずかれないでいる。子ども自身にとっても、第三者にとっても、学校ほど貧困をひしひしと感じられる場所はない。きっかけは教材がそろえられなかったり¹⁷、古着だったり、遠足や給食の費用を払えないことだったりする(Beisenherz,2002:81-82)。こうした悪条件はフラストレーション、社会的疎外感、後の学習不足の温床となり、まぎれもなく貧困児童の教育機会を減ずることになる。その結果、同じ社会階級を繰り返さなければならないリスクは、上層に比べて5倍も高い(Butterwege/Klundt/Belke-Zeng,2008:276)。ドイツ児童のうち、79%が4年生を終えた後にギムナジウムに進む一方で、貧困児童ではその割合はわずか16%である(Butterwege/Klundt/Belke-Zeng,2008:168)。

教育の参加機会は、身体的情緒的安寧と密接な関係にある。貧困児童はしつけの段階で、発達が遅れ健康に問題のある¹⁸場合が比較的多く、効果的な学校教育のためのスタート条件を悪化していると考えられる。子どもたちの健康習慣も、貧困により悪影響を受けている。このことは標

準を上回る嗜好物の大量消費ばかりでなく、歯科衛生、食事、スポーツ活動への参加、予防検診の受診などの状況にも現れている。医師を訪ねる機会が乏しいために、急性・慢性疾患の増加が見られる(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:163-165)。日々直面する社会的疎外感や参加機会のなさから起こる緊張を、子どもは様々な方法で処理している。攻撃や規則を破ることで外に出す場合もあれば、内に押し込める場合もある(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:173)。後者の場合、精神身体的障害および精神的障害、たとえば、鬱、将来に対する不安、不眠、注意欠陥、奇妙な行動を引き起こす(Neuberger,1997:109-110)。

それでもなお、貧困と同時に参加機会が自動的になくなってしまうわけではない、という点は、強調し続けるべきである。貧困状況が児童の安寧と生活における参加機会に及ぼす独特な影響は、生活の各次元が複雑に作用し合って初めて生じるのであり、複数の外部要因を通じて影響する。そのような要因としては、とくに家族関係や社会環境、貧困期間の長さ、施設扶助の提供などが考えられる(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:172)。

注

- 1 本稿は、とくにリュルケ(2009)の研究によるところが大きい。
- 2 たとえば、ユニセフ(2000)の『豊かな国々の児童の貧困』や、2006年のISS-AWO(社会労働教育研究所-労働福祉連盟)(2006)の『ドイツ児童の生活環境と機会』(Holz, 2006年)などがある。2008年に3度目の出版が行われた連邦政府の『貧困・富裕レポート』も、特別に章を立てて子どもの貧困を扱っている(BMAS,2008)。
- 3 イギリスにおける調査が確証したところによれば、国内子どもの貧困率が高くなるにつれ、子どもの貧困のつらさは感じにくくなる(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:162)。ただし、社会構造は国によって異なるため、このような認識をそのまま他国に当てはめることはできない。したがって、ドイツに対しては改めて裏付けをとる必要がある。
- 4 ブラウンとコルベットはこの点に関して、貧困概念の想定しうる5つの適用法を特定している。その5つとは記述用法、モニタリング用法、ゴール設定用法、責任用法、評価用法であり、適用される文脈によって登場頻度は異なる(Beisenherz,2002:344)。
- 5 たとえば、低賃金雇の拡大により平均所得が減少すると、統計的に見て貧困も減少することになるが、個人的状況にはならぬ影響がない。個別の人口グループ、たとえば、若年層の家族や障害者などに特有な需要も同様に、マーケットバスケットの構成において十分には考慮されていない(Hock,2000:22-23)。貧困度測定にまつわる問題は、貧困研究の中心的テーマの一つである。これに関連して包括的に述べている資料として、ヴァルター・クレマーが連邦健康省に委託されて作成した所見『貧困度測定における統計上の問題』(Krämer,1997)などがある。
- 6 ブッターヴェッグはヴァイサーの生活状況アプローチに基づき、貧困を「4つの中心的な生活領域のうち、少なくとも2つの領域における供給不足が重なった状態」と定義している。ただし、ブッターヴェッグは労働、教育、住居、健康の中心的次元を前提としている(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:136-137)。
- 7 社会的変化要因には生活水準、生活費などがある。個人的変化要因としては年齢、性別、教育、健康などがとりわけ重要である(Sen2000:111-112)。
- 8 社会法典(SGB)には、ドイツ社会保障法の規則がすべて網羅されている。社会法典は12編からなり、各編はそれぞれ独立した法律集である。第2編には、2005年1月1日に発効した求職者基礎保障、いわゆる失業手当Ⅱに関する規則が含まれている。ここで児童は請求権を持つ世帯、つまり要扶助世帯の一部としか見なされていない。児童は社会法典第2編第28条に従い、社会手当を受ける。現行法による手当額は、14歳の誕生日の前日までは通常基準の60%(207€)、14歳になってからは通常基準の80%(276€)である。しかし、児童手当は通常、両親の所得として計上される。
- 9 リスク社会という概念は、ミュンヘンの社会学者ウルリッヒ・ベックが作り出したものである。ベックは1986年、同名の著書で初めてこの概念を用いた。高度に発展した産業社会では新たなリスクが絶え間なく生じ、国家システムはこのリスクを十分に克服することはできない、という事実を、ベックはこの著書で考察している(Beck,1986参照)。

- 10 上乗せ受給者とは、収入だけでは最低生活費をカバーできないために、所得に加えて社会法典第2編による社会給付を補助的に受給している就業者を指す(BMAS,2008:95)。2008年8月現在,上乗せ受給者は130万人を超えていた(田畑,2011:40)。
- 11 普通の家庭の消滅を示す明らかな兆候は、たとえば、独りで子育てしている母親の人口であり、1970年から1997年の間にほぼ2倍に増えた(Beisenherz,2002:56)。
- 12 低賃金層就業者の80%は女性である(Beisenherz, 2002:65)。
- 13 家族政策給付は今日なお、従来の家族像に基づいており、その結果夫婦に対する給付に焦点が当たることになる。この傾向は、たとえば、育児休暇および育児手当をめぐる規則、夫婦単位課税制度、法定健康保険における妻の無料家族保障、不十分な個人扶養請求権、ならびに僅少労働の税法または保障法の規則に現れている。このような夫婦中心主義は、配偶者に対する女性の依存を高め、独りで子育てする女性や結婚しないカップルに不利に働く(Bäcker,2000:260、Benz,2008:388)。
- 14 雇用エージェンシーによる対応に関しても、クリストフ・ブッターヴェグによれば、女性は明らかに不利である。「女性たちはケースマネージャーから再教育や資格取得措置を許可されず、期限付きのアルバイト、いわゆるミニ・アルバイトやメディ・アルバイト、または[超過支出補償を伴う労働機会](いわゆる1-EURO-Jobs)を指示されるケースがあまりに多い。」(Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:109)。
- 15 たとえば、遊ぶ様子、言葉、課題をこなす様子の奇妙さに、認識的発達の遅れが認められる。この子どもたちは、しつけもおざりにされることが比較的多い。団体行動ではどちらかと言うと受身で、引込み思案である。また、同年代の子どもたちから離れて独りでいる傾向が早くから認められる(Holz,2006:6-7)。
- 16 上層には学界、政界、および知的労働のエリートが含まれる。中間層は自営業者、被雇用者、公務員、および程度の様々な資格を持つ労働者から成る一方、下層には職業訓練を受けた、または受けていない労働者、ならびに失業者と社会扶助受給者が分類される。(Röleke,2009:16)
- 17 社会法典第2編による受給者の子どもは、文房具と読本を購入するのに月1.3ユーロをもらう。学校費はまったく考慮されていない(Holz,2008:498)。連邦政府が社会法典第2編による受給者に対して計画した100ユーロの学校費用加算も、部分的な足しにしかならない。2005年1月の時点で、学童の入学に関わる費用だけですでに180ユーロかかっていた。両親は現在、月に207ユーロの児童手当を受けているが、外部からの扶助がない限り、この金額はとうてい払えない(福祉平等協会、2005:5)。
- 18 言語障害、知覚障害、精神運動障害、知能発達の遅れ、感情的・社会的障害、精神医学上の異状などが含まれる(BMAS,2008:107-108)。

文献

- Arndt, Christian/Volkert, Jürgen 2006: "Amartya Sens Capability-Approach. Ein neues Konzept der deutschen Armuts- und Reichtumsberichterstattung, in: DIW (Hg.): *Vierteljahreshefte zur Wirtschaftsforschung 75/1*, S.7-29.
- Axhausen, Silke 2002: "Armut und Reichtum", in: Endruweit, Günter/Trommsdorff, Gisela (Hgg.): *Wörterbuch der Soziologie*, 2. Auflage, Stuttgart: Lucius & Lucius, S. 36-37.
- Bäcker, Gerhard 2000: "Armut und Unterversorgung im Kindes- und Jugendalter. Defizite der sozialen Sicherung", in: Butterwegge, Christoph (Hg.): *Kinderarmut in Deutschland. Ursachen, Erscheinungsformen. und Gegenmaßnahmen*, Frankfurt a.M.: Campus, S. 244-269.
- Beck, Ulrich 1986: *Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Becker, Irene/Hauser, Richard 2008: "Vom Kinderzuschlag zum Kindergeldzuschlag. Ein Reformvorschlag zur Bekämpfung von Kinderarmut", in: Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung (Hg.): *SOEPPapers on Multidisciplinary Panel Data Research 87*, Berlin: Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung.
- Beisenherz, Heinz Gerhard 2002: *Kinderarmut in der Wohlfahrtsgesellschaft. Das Kainsmal der Globalisierung*, Opladen: Leske & Budrich.
- Benz, Benjamin 2008: "Armut im Familienkontext", in: Huster, Ernst-Ulrich/Boeckh Jürgen/Mogge-Grotjahn, Hildegard (Hgg.): *Handbuch Armut und Soziale Ausgrenzung*, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften, S. 381-399.
- BMAS, Bundesministerium für Arbeit und Soziales (Hg.) 2008: *Lebenslagen in Deutschland. Der 3. Armuts- und Reichtumsbericht der Bundesregierung*, http://www.bmas.de/coremedia/generator/26742/property=pdf/dritter_armuts_und_reichtumsbericht.pdf [Stand16.10.2008].
- Bourdieu, Pierre 1987: *Die feinen Unterschiede. Kritik der gesellschaftlichen Urteilskraft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Bourdieu, Pierre 1987b: *Sozialer Sinn. Kritik der theoretischen Vernunft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Bourdieu, Pierre 2005: *Die verborgenen Mechanismen der Macht*, Hamburg: VSA.

- Buhr, Petra 1998: "Übergangsphase oder Teufelskreis? Dauer und Folgen von Armut bei Kindern", in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 72-86.
- Bundesagentur für Arbeit 2008: *Der Arbeits- und Ausbildungsmarkt in Deutschland. Monatsbericht Oktober 2008*, Nürnberg: Bundesagentur für Arbeit.
- Butterwegge, Christoph/Klundt, Michael/Belke-Zeng, Matthias 2008: *Kinderarmut in Ost und Westdeutschland*, 2. erweiterte und aktualisierte Auflage, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften.
- Dangschat, Jens 1998: "Sozialräumliche Aspekte der Armut im Jugendalter", in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 112-133.
- Hauser, Illichard 1997: "Vergleichende Analyse der Einkommensverteilung und der Einkommensarmut in den alten und neuen Bundesländern 1990 b 1995", in: Becker, Irene/ Hauser, Illichard (Hgg.): *Einkommensverteilung und Armut. Deutschland auf dem Weg zur Vierfünftel-Gesellschaft?*, Frankfurt a.M.: Campus, S. 63-82.
- Hock, Beate u.a. 2000: *Gute Kindheit- Schlechte Kindheit? Armut und Zukunftschancen von Kindern und Jugendlichen in Deutschland. Abschlussbericht zur Studie im Auftrag des Bundesverbandes der Arbeiterwohlfahrt*, Frankfurt a.M.: ISS-Eigenverlag.
- Holz, Gerda 2006: "Lebenslagen und Chancen von Kindern in Deutschland", in: *Aus Politik und Zeitgeschichte 26/2006*, 26.06.2006, S. 3-11.
- Holz, Gerda 2008: "Kinderarmut und familienbezogene soziale Dienstleistungen", in: Huster, Ernst-Ulrich/Boeckh Jürgen/Mogge-Grotjahn, Hildegard (Hgg.): *Handbuch Armut und Soziale Ausgrenzung*, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften, S. 483-500.
- Krämer, Walter 1997: *Statistische Probleme bei der Armutsmessung. Gutachten im Auftrag des Bundesministeriums für Gesundheit*, Baden-Baden: Nomos.
- Leßmann, Ortrud 2006: "Lebenslagen und Verwirklichungschancen (capability). Verschiedene Wurzeln, ähnliche Konzepte", in: DIW (Hg.): *Vierteljahreshfte zur Wirtschaftsforschung 75/1*, s. 30-42.
- Münch, Richard 2004: "Habitus, Feld und Kapital. Pierre Bourdieus Theorie der sozialen Praxis", in: Ders. (Hg.): *Soziologische Theorie. Bd.3: Gesellschaftstheorie*, Frankfurt/New York: Campus, S. 417-454.
- Neuberger, Christa 1997: "Auswirkungen elterlicher Arbeitslosigkeit und Armut auf Familien und Kinder. Ein mehrdimensionaler empirisch gestützter Zugang", in: Otto, Ulrich (Hg.): *Aufwachsen in Armut. Erfahrungswelten und soziale Lagen von Kindern armer Familien*, Opladen: Leske&Budrick, S.79-122.
- Rölke, Ricarda 2009: *Kinderarmut in Deutschland: Wie wirkt sich Armut auf die Lebensbedingungen und Verwirklichungschancen von Kindern aus ?*. Grin Verlag.
- Sen, Amartya 2000: *Ökonomie für den Menschen*, München/Wien: Carl Hanser Verlag.
- Unicef 2000: *Child Poverty in rich Nations*, Florenz: Unicef.
- Zander, Margherita 2008: *Armes Kind- starkes Kind? Die Chance der Resilienz. Aufwachsen in Armut*, Wiesbaden: VS - Verlag für Sozialwissenschaften.
- 阿部彩(2009)『子供の貧困』岩波新書
- 田畑洋一(2011)「ドイツ社会法典第2編とニーズ共同体」『週刊社会保障No.2626』S.40-45.
- 田畑洋一(2012)「ドイツの『ハルツIV』と子どもの貧困」『週刊社会保障No.2684』S.50-55.

Poverty of Children in Germany

Yoichi TABATA

Growing up in poverty, especially in socially culturally and educationally imprinted poverty means the possibility to have developmental risks. These risks adversely affect children in the process of overcoming the developmental problems that society imposes them. As a whole, what economical need influences one, when gaining cultural and social capital, accelerates to settle the poverty. At the same time, domestic social and cultural resources are critically important to overcome the current poverty and to distribute the opportunities to participate in the future life. In this paper, from these points of view, we discuss the long term influential mechanism of poverty of children in the rich country, Germany.

Key Words: the poverty of children. the reproduction of the social class. habitus. chance.